

## シンポジウム 浅間山荘から四十年 当事者が語る連合赤軍

主催：連合赤軍事件の全体像を残す会

日時：2012年5月13日（日） 午後1時30分～6時30分

会場：目黒区民センター

司会：金 廣志 椎野礼仁

当事者：植垣康博、青砥幹夫、雪野建作、前沢虎義

第1部 「映像でふりかえる」

当時の資料映像で構成（制作：馬込伸吾）

第2部 「当事者世代が語る」

●ゲストパネリスト

塩見孝也、三上治、鈴木邦男

第3部 「連合赤軍事件が残したもの」

●ゲストパネリスト

森達也、田原牧、大津卓滋

第4部 「若い世代にとっての連合赤軍」

●ゲストパネリスト

雨宮処凛、山本直樹、ウダタカキ、小林哲夫、赤岩友香

※ シンポジウムの第1部での開催挨拶と、第2部「当事者世代が語る」での発言を掲載します。なお、発言が聞き取れなかった部分は省略していますので、要約版です。

発言の全体を知りたい方や第3部、第4部の発言を知りたい方は、「連合赤軍事件の全体像を残す会」発行の「証言10号」（2012.7発行）をご覧ください。



## 第1部 「映像でふりかえる」

雪野『2月に追悼会を開催いたしました。この時はあくまでも追悼だということで、事件そのものの意義ですとか、今、それを振り返ってどういうことを考えるか、といった議論はあまり展開しない形で追悼に的を絞って開催いたしました。

ただ、何分もう40年も経っておりますし、今の時点で当時のことについて、もっともつと話さなきゃいけないのではないかということで、追悼会とは別に本日のシンポジウムを開催することになりました。

今日はお手元のプログラムにありますように、まず映像で振り返るということで、約20分ほどの新しく今回のために作成した映像をまず放映いたします。

その後、当事者が語る、連合赤軍が残したものの、若い世代にとっての連合赤軍という形で進行してまいります。

申し遅れましたが、私、本日の総合司会をやらせていただきます雪野と申します。

それでは第1部の「映像でふりかえる」をこれから始めます。』

<映像の上映 約20分>

## 第2部 「当事者世代が語る」



金『今日は皆さんよくお越しいただきました。第2部として「当事者世代が語る」というテーマでシンポジウムを行いたいと思います。まず、壇上に居る人をご紹介したいと思います。私は本日の司会を務めさせていただきます、元共産主義者同盟赤軍派に所属していました金廣志と申します。』

椎野『サブで司会を務めます椎野礼仁と申します。社会主義学生同盟、社学同の、のちに戦旗派の方に行きます。三上さんの叛旗派とか、塩見さんの赤軍派とは袂を分かった方の戦旗派の方に所属することになりました。』



金『それでは、皆様の方から向かって右側の方から紹介していきたいと思います。今日は、先ほど名簿にもありましたけども、いわゆる連合赤軍メンバーと言われていた方が3名来られています。

まず、一番右側、青砥幹夫さんです。弘前大医学部時代から運動に入って、最後、連合赤軍メンバーとして獄中23年間生活を送りました。公の場に出てこういう発言をするのは、ほとんど初めてではないかなと思います。

その隣ですけども、植垣康博君です。さきほど、写真で非常にイケメンで男前の顔が映っていましたが、今は見るも無残な衰れな姿ですけども、(笑)連合赤軍メンバーとして獄中27年間の獄中生活を送っています。現在は静岡県でスナック「バロン」を営んでいます。

その隣です。前沢虎義さんです。革命左派に所属して連合赤軍メンバーとして15年の実刑判決を受けて、満期で出所しました。

その隣、やはり元革命左派で雪野建作さんです。雪野さんは栃木県の真岡市の銃砲店を襲った時のメンバーです。その時のことで、約10年獄中生活を送っています。

それでは向かって左側の方、端からご紹介させていただきます。

一番左端は皆さんよくご存知だと思うんですけども、元赤軍派議長塩見孝也さんです。

現在は駐車場管理人という職業も持っておられます。今日はいろいろ楽しいお話が伺えるかなと思います。

その隣が、やはり皆さんよく御存じの鈴木邦男さんです。

右翼活動家として全国学生自治会協議会の初代委員長を務められました。最近は転向して左派系の運動家になっているという噂もありますけれども、本人は民族派だと言っております。

その隣ですけども、三上治さんです。いわゆる共産主義者同盟、ブントと言いますけれども、ブントは1969年に大きく分裂したんですけども、その時の共産主義者同盟叛旗派の指導者としてご活躍なされました。

世間では塩見さんを左派、三上さんを右派と言うような言い方をするような意見もありましたけども、どちらがより過激な闘争をやっているかどうかだけで判断されたいように思います。

このシンポジウムの進行なんですけども、まず最初にパネリストに約5分以内で、現在パネリストが抱えているいろんな問題意識、あるいはこのシンポジウムに向けて議論したいこと、そのようなことを5分程度語っていただいて、そして、それに対して当事者がその意見にいろいろ答えていく、という形式にしたいと思います。

ということで、塩見さんからお話伺いたいんですけども、塩見さんが今、抱えているテーマあるいは問題意識について5分程度お話いただければと思います。』



塩見『皆さんこんにちは、塩見です。私のテーマと言われたんですけども、一つはこのパネルディスカッションを組織された主催者に感謝するということと、それからもう一つは、ここへ4人の当事者の方がいらっしゃる訳ですけど、私はこれまでいわば赤軍派の4名から5名、そして革左の7名という形で、その人々の立場に立って物を見ると思っていて、ある面では生き残った人々についてはしっかり考えてなかった。

その人のことしか考えてなかったと思っている訳ですけど、今は亡くなった人々の分までしっかり生きて、そして正しく闘って欲しいという気持ちでおります。

そういう形で討論ができれば、と思っています。

僕がテーマを出すとするならば、もちろん当然にも何故あのような同志殺しというか、リンチ殺人事件が起こったのかについての具体的な経過の調査分析から、その基本的な原因は何かということが1点です。

これについては、私は、意見の違う世界観の違う党派が野合して、それでもって新党作ることに於いて、新党反対派が、新党が作られる過程での機関を作るという意味で、森一永田体制を評価するというこのために、排除されていった人々が粛清されたと思っています。その根底には、やはり、中国を経由したところの、基本的には1930年代のスターリン主義の問題について、しっかりとした態度をとっていなかった、あれを革命とかプロレタリア独裁と思いつ込んでいような左翼の状況があったと思っ、これは、このスターリン主義の批判というものをしなければならぬ、と思っています。

スターリン主義はもう過去のことだとおっしゃいますけど、これからの情勢の中でもう一度蘇ってくる危険性のある問題である、と考えます。

二番目には、ブントと赤軍派と革命左派について、どういう違いがあったのかということについて聞きたいと思っています。

三番目は、あの連赤事件が起こって以降、連合赤軍事件はいわば左翼のトラウマというような形で、そのことを解決する以上は闘い得ないという状況がそれから20年間続いていたと考えます。

左翼は二つの安保闘争で日本的な形の市民社会が成立して、市民社会と云うブルジョア社会ですけども、憲法を軸にするような市民社会が成立した。そういう意味では、隙も漏らさぬような資本の支配が貫徹して行く中で、左翼はどう生き延びてきて、そして、何を武器にして闘ってきたのか、そして現在にどう至っているのか。

この時にいろんな留保をしながら、生命と命と人権、あるいは幸福を追求する権利とか、反戦平和民主主義、あるいは環境、よりよき生活といった、我々が最後の最後までどうしても守らなきゃならないことについて、これは譲れんということだけを、この市民社会の成熟の段階で守り抜きながら生き抜き、戦い抜いてきて、そして、その中で今は反原発闘

争などの形で基本的な前進を遂げているんですけども、にもかかわらず、この運動が未だトラウマを抱えている、そういう意味で連合赤軍事件をしっかりと私たちは総括して、その総括が力になっていかなければならない、と思っています。

そういう意味で私の結論は、今の闘いの前進を非常に喜ばしく思い、本質的な意味で正しいと思っている訳ですけども、これにやはり資本主義批判、プロレタリア独裁という問題をヒューマンに民主主義的な形で実現していくような手法が問われていく必要があると考えております。

それらのことについては、皆さんと共に、あるいはパネラーと共に討議していきたいと考えております、以上です。』

金『塩見さん、ありがとうございました。次に、三上治さんに問題提起をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。』

三上『三上です。当時赤軍派と対立していたグループとして、塩見さんを、1970年（筆者注：1969年7月）ですね、中大の大学で監禁したことがある。これは4月の沖縄闘争の事件で指名手配されてまして、地下に潜って、ある時は塩見さんたちと中央委員会というところで激論していて、しかし赤軍派といろんな対立が起こって監禁していて、その後、9月くらいに僕もパクられて1年間入っていたことがあるんですけど、そういう中でですね、赤軍派はどちらかという、赤軍派、あるいは赤軍派から発生したさまざまな、当時の蜂起戦争派というか武闘派というか、そういう人たちに対して割と対立的な立場、批判的立場に立っていたということが一つあります。



ですから、連合赤軍事件が起こった時も、ある面では外部的に見ていると、必然的にそうなってしまったなというような側面で批判できるということと、もう一方で、ある程度その前段を見ていると、時代の共有性とか同時代的なものもある訳ですね。

ですから、これを外部的な意味での批判ではちょっと違うんだな、外部的な批判はしたくない、だから傍観者的な立場の批判は簡単ですけど、そうじゃないという、同質性というか時代性も感じている。

ですから、ある面で言うと非常に自分の内部では複雑なというか、矛盾的な感情を抱きながら連合赤軍事件を見てきました。

別の比喻で言いますと、終戦直後に戦争批判をどうするかということで、作家の田村泰次郎という「肉体の門」とかで流行作家になった人ですが、彼は戦争中に中国大陸で5年間くらい兵士として戦争してまして、戦後に割といい小説を書いているんです。

「春婦伝」という小説がありまして、これは「暁の脱走」という日本映画になっている作

品ですが、この中で彼が言っているのは「戦争は悪いけど、基本的に悪夢みたいなものだけど、戦争の中で人間がどのように振る舞うのか、どのように変身するのか、何故人間が戦争するかという、そういう問題を抜きにして、ヒューマニズム的な立場、あるいは傍観者的な立場で戦争を批判したくはないんだ」ということを書いて、彼は晩年にいい作品を書き始めて亡くなっちゃうんですけど、よく似た感情だなと思ってですね、この問題は、どういうところで解いたらいいのか、現段階でつながるのかという、時間がありませんので簡単に言いますと、一つは当時の権力に向かう時に、我々がどういう立場の、いろんな立場があると思うんですけど、左翼、右翼とか、でもいずれにしても政治的土俵の中で理念から行動から一致したある種の共同体な意識として、共同的な人間として、その世界を振る舞う訳です。

その共同的な人間の振る舞い方、在り方、そのことを通して革命を実現していく、あるいは社会の正義を実現していく、あるいは自分の夢を実現していく、あるいは自分のさまざまな理想を実現していく、次の社会のビジョンでもいい訳ですが、そういうことを演じる訳ですね。

その時に、今我々が、当時の持っていた実際上の理念の振る舞いということと、我々が意識して、例えば集団の中だったら戦後世代ですから民主主義的にやろうとか、自由主義的にやろうとか、内部で反ヒューマン的は、反民主的な、反自由的なことは起こらないだろうということを漠然と前提にはいるんですけど、でも実際に集団の内部ですら、起こると、全く違ったことが行われてしまう、このことの問題は何だったんだろうということを出し合ってきた中でずっと考えてきました。

たぶん、その中に、きっとこのことが一番現代の課題になっているんじゃないかということになるのは1点ありまして、我々が意思する側というか、我々は自由でありたいとか、民主主義でありたいとか、そういうことをインテリゲンチヤでなくとも、一般的に社会参加する時に、そういう漠然とした立場がある訳ですね。左翼運動で急進的であるとか、緩やかであるとかということとは別にしてもあると思うんです。

そういう近代主義的な意識と言ってもいいんですが、そういう意識で革命や社会や運動や、内部の運動の構成をこういう風にやっつけようとか、こういう風に自分の他者との関係を作っつけようという形で振る舞う訳ですが、實際上、運動がもし本当のところ力を持って行ってしまったら、果たして内部で働く論理、我々はその中で共同的に振る舞っているあり方、あるいはそこの中で我々が使っている論理、我々のエネルギーになっている力の源泉というものがですね、もっと違ったものであるのではないかと。

つまりそれは作家田村泰次郎が言いましたように、人間をホモ獣にしてしまうようなもの、あるいは全く人間と違った風に振る舞わせてしまうみたいな共同性の原理、共同的な人間のあり方の原理が振る舞ってしまうのではないかと、このことの問題を運動する側が、我々が意思する以前に外から意思させられてしまうとか、自分が捕まえられるという、そういう形で働かないと、本当の意味では政治的な力にならない、ということがこの

運動の中にあっただのではないか。

だから、さっき塩見さんが言ったスターリン主義批判の意味ですが、今までの左翼だと、スターリン批判やそういうものを封建主義だとか、個人とか近代主義批判の中でやってきたことに対して、そうじゃなくて我々が共同的なあり方として振る舞っている人間の歴史性というものは、もっと違った形で我々を無意識を含めて拘束していて、それはなかなか見えないんですけども、そういう運動の本当の場面、命をかけたとか、一番共同的なものが全面的に力を発揮してくるような場面になると、それが出てくるんじゃないか、というようなこと、その事に対して我々が内在的にどのように自覚し、そのことを不断に運動の中で超えていくという考え方、思想がないと、そのところが越えられなかったのではないか。

たぶん、そのところに僕自体は日本の社会をどう作っていくか、社会をどう超えていくのか、あるいはどういう社会を形成できるのかという時にですね、社会を形作っている、思想として持っている共同意識というやつを、やっぱり近代主義的な意識、近代的な自由や民主主義に依存しすぎたことの欠陥がそこに現れたのではないか。その中には、もっと我々が伝統とか歴史とか共同性というものが全部含まれていて、そのこと自体に対して、内在的に我々はそれを捕まえて、また、そのことをやらなければ力にもならないし、かつ様々な矛盾が生じてくる、内部で生じる矛盾を回避できないのではないか、という点で、そのところを非常に連合赤軍事件は提起したのではないか。このことは現在もこれからもつながっていくのではないか。

今は割と平穏な時代ですから、今みたいな時代だと世の中は民主的で大体いいよ、大体自由で民主的でいいよ、ということで距離感をもって国家や社会に対しても関係ないよ、あるいはちょっと非民主的だねということで批判できるんですが、本当に国家の問題が我々に全面的に出てきて、我々がまだ国家の一員として、社会の一員として何かに振る舞わなければならなかった時には、決してこういう論理だけでは参加もできなければ、その場で振る舞えないのではないか、あるいはまた、そういう場面で我々が振る舞ってしまったら、違った形で振る舞いをするんじゃないか、というような問題を連合赤軍事件は歴史として残してくれたのではないか。

ただ、逆にそのことは、従来の考え方、思想で、我々自体が起こっている事柄に対して対象的にならないと、どうしてもつかめないので、連合赤軍事件はたぶん事実としては解明されていくでしょうけれど、そこで起こった精神的、心理的展開というものが残された謎として残されていくのではないか。

このことはまだ現代の課題でも、現代の政治運動や社会運動や権力との運動の中でも、少しでも緊張感のある、本当の意味での闘いに近づいたら、必ずもう1回喚起されるてくる残ってくる問題なんだなという風に考えています。

ただ、この問題はたぶん僕らもいつの間にか70近くになってしまったんで、そんなに先長く無いのかも知れませんが、僕らが生きている間に解決するかどうか分かりませんが

ね。この問題は歴史の問題として、自分が生きてきた歴史の問題として、きちんと解いていきたい、と考えています。以上です。』

金『三上さん、ありがとうございます。三上さんのお話にあった内容については、当事者にもう少し深く突っ込んだ話を伺いたいと思います。それでは鈴木邦男さんの方から問題提起をしていただければ、と思います。』



鈴木『鈴木邦男です。左翼の人たちの言っていることは難しく分らないですね。(笑) 三上さんとか。僕だけ部外者ですみません。皆、左翼の闘士ばかりで、隣で塩見さんに「お前は部外者だから気楽でいいな」とさっき言われましたけど。今考えるとそうかもしれませんけれども、先ほどの映像を見ても、なんか暗いですよ。(笑) それで、僕は植垣さんと話をしている時に、「週刊金曜日」で話をしている時に植垣さんがポロッと言ったんですけども、「あの頃は、40年前は評論家だとか知識人だとか文化人だとか、連合赤軍問題を語る人は碌な奴はいなかった。

結果的には政府や警察や、そういうサイドの見方に全部洗脳されてしまった。ほら見ろ、革命や世界や人のためだとか、そんなことを考えるとこういうことになるんだ、だからそんなこと考えちゃいけない、というところに総括させられた。もし、あの時に三島由紀夫や高橋和己が生きていたら別の方向になった」と、成程なと思いますね。

たった2人ですけれども、その2人がいたら違ったりするね。今考えると、僕らはあの時は三島由紀夫もいなかったし、高橋和己もいなかったから、「ひでえ連中だな仲間殺しをして何でそんなことまでするのか」と思いました。

今考えると、失敗した革命だからああいう形でさらし者にされたんだろうな。もし革命が成功していれば、ロシア革命やキューバ革命や中国革命や、また日本の明治維新のように成功していれば、それ以前にも同じようなことがいっぱいあった訳ですよ、仲間殺しだとか。

でも成功した革命の直前になったら、その革命の前には、そういう非常に貴重な、また痛ましい犠牲があったという形で皆に悼まれる、称えられることだったと思います。

それが、日本では革命が出来なかったから、ほら見ろ、革命なんてやろうとする人間は皆こうなるんだ、という形でさらし者にされたんじゃないか。

本当は、僕も連合赤軍事件はよく分からなかったんですけど、それから10年20年経っていろんな関係者と話し合ってみると、みんな夢を持って、また運動が楽しかったから、善意でもって当時は革命運動に入っているんですよ。どこからそれが間違ったのか、それはきちんと検討する必要があるだろう。



ところが、今は悪い面ばかりが伝わっているんじゃないか。かつての革命運動の夢や愛や、そういったものが一切伝わらないで、悪い面だけが伝わっている。

新左翼の連中はこういうことをやったんだ、ああいうことをやったんだ、そういう批判をするくせに、そういう新左翼の過ちを自分たちも批判しながら学んでいるじゃないか。

例えば非常に排他的な人たち、左翼の人たちだけでなく保守派とか右派と言われる人たちもそうです。

数日前に、君が代を拒否して10回の処分された根津さんという人の話を聞いたんですけども、君が代を歌わないだけで停職6ヶ月間されるという、それはひどい話だと思います、僕は。僕は君が代と日の丸好きですけども、そういうものを拒否しただけでそんなことをする、それで更に再発防止委員会に呼ばれて、みんなに囲まれて「何故君が代を歌わないんだ」「何故日本人はみんな歌っているのに、お前は反対するんだ」、みんなで集中砲火を浴びせて連合赤軍だなと思いました。(笑)

だから、保守派も全部今は連合赤軍になっているんです。

それから新しい教科書を作ろうとか、あるいは北朝鮮の拉致を許さないとか、みんなそうです。異論を許さない、疑問を許さない、全ての人は同じことを考えていくべきだ、日本人なんだから分かるはずだ、そういうことで言っています。

それが僕は連合赤軍化する日本だと言ってますけど、それは極端に言ったら、連合赤軍の人たち、ここに居るみなさん方の責任ですよ。

また、警察やマスコミにも乗じられたことも責任だと思います。

TBSで植垣さんと連合赤軍の番組に出たんですけども、僕らの前に警察側が出てたんですね。佐々さんたちが。その中で「連合赤軍の連中は一度も謝罪していない、警察官を2人殺している、それからもう一人、果物を届けに行った民間人も殺している」。ここに居る人たちはみんな自分たちとは関係ないと言うかもしれないけど、仲間が殺したんですよね。僕はそれはきちんと謝罪すべきだと思います。

できたら一緒に追悼会でもやるべきだと思います。その上で何故ああいう事件が起きたのかを、きちんと自分たちで語る、また自分たちはこういう意思で、こういう夢を持って運動をやったんだ、ということ、革命運動の楽しさをもっともっと話すべきだと思いますね。

そうでないと、何時まで経っても暗い連合赤軍のイメージからは払拭できないんじゃないかと思います。

そういう意味で今日は当時の楽しい面や、そういうものも含めてどんどん話してもらいたいし、これからどうやったらいいのかも含めて語ってもらいたい。

今、浅間山荘は中国資本が買って博物館にするとか言ってますけど、それはやっぱり我々が、運動関係者がみんな金を集めて買い戻すべきでしょう。革命博物館にすべきでしょう。また、浅間山荘見学ツアーだとか、なんかやりましょう。当時を思い起こして、三島由紀夫や高橋和己はいなかったんですけども、我々がその気持ちになって、もう一度あの時代

を考える、そういうことをやらなくてはいけないんじゃないか、と思っています。  
ありがとうございました。』

金『鈴木さん、ありがとうございます。最初5分という話だったんですけども、5分を守っていただけたのは塩見さんだけで、塩見さんが20分かかるんじゃないかと思っていたら塩見さんが5分で終わりましたけれども、ありがとうございます。

今、出た話を少しまとめますと、塩見さんは、要するに連合赤軍問題というのは、革命左派と赤軍派という路線の違う両派が野合して反対派を粛清した、要するにスターリン主義だったんだ、というような話がありました。そして連赤事件というのは、現在の闘う左翼のトラウマになっている、これをどこかで乗り越えていかなければならないんじゃないか、というお話があったと思います。

三上さんの方からは、一つは共同的な人間の振る舞い方によって、要するに権力の形というのは変わるんだということと、共同的な振る舞いと歴史というのは違う、そうするとそれは不断の運動によって越えていかなければならない問題なんではないだろうか、というお話があったと思います。私のまとめ方が下手かもしれませんが、今、手短かに言うとういうことかなと思います。

鈴木さんのお話なんですけど、要するに仲間殺しなんて歴史にいくらでもあったんだ、100年くらい経つと新撰組みたいに英雄になるんだ、もっと殺した方がいいぞ。(笑) そんなことは言ってませんが、失敗したためにさらし者にされたということですね。

動機は善意から始まった、という話もありました。現代の排他的、あるいは統一的な集団を求める現代の風潮というのは、連合赤軍化する日本、あるいは連合赤軍化する現代社会、要するに連合赤軍の問題自体が現代につながっているんだ、という話がありました。

そして最後に、要するに謝罪しろと、ということで青砥さんの方から謝罪からいきますか。今、いくつかのお話が出ましたけれども、塩見さん、三上さん、鈴木さんからお話が出ていますけれども、自分としてはこれにちょっと引っかかることがあるかなというところから一つどうでしょう。』

青砥『初めての、私はあまりこういった機会に登場することは無かったんですが、その理由は、あの事件の後、私が一番感じていたのは、土壇場で人間として踏みこたえられなかったな、という思いが非常に強かったんですね。

その反省の上でしょうか、他人の意見とか考え方、そういったものに安直にダメ出しをしない、意見をしない、ということをも自分の信条にしていった、ということがあります。

その中で、今回、こういった形で出てきたというのは、考えが少しずつ変わってきたところがあるんですけど、私が指摘したい



のは森さんの膨大な自己批判書の中に、山田さんの山の中でのCC会議の会話の一つとして、こういったものが記載されていたように思います。

山田さんが「死は平凡なものであるから、死を突きつけても総括要求にはならんのだ」という発言をした、という記載があります。

これは私の頭の中にずーと昔から今もこびりついております。この話は、塩見さんの話と、それから三上さんの話と関連すると思うんですが、山田さんが「死は平凡なものだから」と言ったのは、別に彼が死を平凡なものだと思っていた、ということでは全くありません。死は個人的なものであり、一回のもんですから、特別なものであって平凡なものであるはずがない。そんなものは山田さんは先刻承知です。

ただ、そういう形でしか、実際に進行している総括要求と、その中で同志がどんどん殺されていく、そういったものに対する反対の意見を述べるのが出来なかったからそういう表現をした、と私は思っています。

むしろ考えなきゃいけないのは、我々はみんな徴兵された訳ではなくてボランティアなんですね。志願兵です。志願兵ですが、最初から出来上がった志願兵ではなくて、それぞれ革命に、あるいはいろんな闘いに入って行く時には、それぞれ皆契機を持っている訳です。それは闘いの中で契機がどんどん変わって行って、最終的に私は革命家になろうと思った訳ですが、それはまた別に高めていくということになりますけども、その人たちのグループですね、連合赤軍はそういうグループでしたけれども、連合赤軍が党派の権力というんですけれども、その中の人間に対して、死を突きつけてもいいんだという状況があったことは確かだと思うんですね。

それに対して抵抗する気持ちも当然たくさんありました。ためらいもありましたけれども、一方で共産主義化とか、援助のための暴力であるとか理屈を受け入れていく自分もあったんです。ためらいと、そういったものを受け入れていく自分があった。

この分裂が自分が到底、何と言うか自分なしにはいられない、というか、そういったことによって、そのことをずーと考え続けてきたというのが、その後の私の40年間だったんですね。

それで、塩見さんが仰ったスターリン主義の問題ですけども、スターリン主義というのは、私の実験の経験から言うと、これは外にあるものではなくて、忍び込んでくるものなんですね。何をしてはいけない、これをしてはいけない、そういった規律が、陳腐な規律ですよ、好きになった女の子の体に触った、触ってはいけないということで暴力を受けていた訳ですから、これは陳腐な話なんです。そんなものがどうして人間の命と等価になっていくのかということが、私は未だに分からない。

そういうことが起こってくるということ、また未だいろんな革命運動の中で、こういったことがたくさん起こってきたと思いますよ。

それで、味岡（三上）さんに先ほど立ち話でお伺いしたんですけども、こういった問題というのは、どうして起こって来るんだ、という話をいたしました。

だから味岡さんには、その辺のことを教えていただきたい。あるいは話をしていただきたい。そのように思っています。ちょっと中途半端ですけども、今言えることはこういったことです。』

金『今、青砥さんの方から、要するに事件の渦中に居た訳ですけども、その中で死を突き付けられた、という話をしていました。昔の資料で見ますと、「自分は山の中で完全に解体された」という手紙を書いたという話も伺っています。

死を突きつけられた中で、ためらいながら自分たちはやってきたんだ、そしてスターリン主義というのは外にあるのもではなくて、そういう中に忍び込んでくるものだ、それについて特に味岡さんとすこし出来ればと・・・』

椎野『味岡さんというのは三上さん、当時の組織名なので。』

金『・・・三上治さん。そういう話がありました。まだ時間が本来はありますので、皆に、いっぺんに3つくらいのことをどうしても言いたい、というところがあるんですけども、できれば短いところで言っただけであればと思います。飛ばして前沢さん、山の中での体験も含めて、よろしくお願いします。』

前沢『革命左派の方に居た前沢です。塩見さんが野合があったというんですけど、実際にはあそこに行き着く前に組織の思想的な問題が解体していて、一緒になった時は両方とも思想の殆ど無い組織が方針でくっついた。現実の方針でくっついた。今、警官を銃撃して倒そう、その1点で一致して、もうその前に我々の理論というのは、たぶん放棄されて、それが原因だと思うんです。

それはまずうちの組織で言えば、最高指導者だった川島というのが逮捕された。彼が我々に対する不信なのか、彼個人の理由なのか、よく分からないですが、奪還しろと。奪還しろ、と言われてどうやって奪還するんだ、鉄砲を持っていけばいい、簡単な発想で。

まあ、長期的には我々は武装闘争、最終的には銃を持って戦う、その点では当時から漠然とは思ってました。実際に爆弾も使ってますし。でも川島を奪還するための鉄砲というのは単に道具ですから、あくまで川島奪還の鉄砲だったんです。そこで上赤塚交番を襲撃して、柴田という仲間が1人殺されます。

そこで、今度は簡単に言えば復讐心、一つの危険な考えを我々は持ってしまった。実際、武器を真岡で取った時に、それに対して権力がどう出てくるか、我々はどう対処していくか、という方針が殆どないまま、敵の弾圧を見て初めて、ああ軍隊になった、という形で、



その後それを考える間もなく、現実的に交番を襲って銃撃戦をやるという形になった時に脱落者が結構次々としたですね。

そういう過程で、最終的に脱落者をどうするかという問題を、結局、危ない人間は消しちゃうという、たぶん、あの事件の本質はそういうことだったと思うんです。

ただ、口先では共産主義化とか、同志の援助だとか言われて、本当かなと思いつつも、それに対して違うとは言い切れなかった。だからああいう形になった、と僕は思うんです。もうすでに山に入る前から、我々は思想的に武装解除を自分でして、あそこに行ったんじゃないか。』

金『一つが三つくらいありましたけども、基本的には自分たちは今、塩見さんの言ったことに対して前沢さんが答えていますけれども、自分たちは思想で野合したんじゃないんだ、すでに思想自体は解体していたんだ、という話ですね。

銃は最少は道具だったけれども、結局それが銃が物神化していったということだと思っただけでも、当時の総括というのは、そんなに大した立派なものじゃなくて、脱落者を始末しちゃえという考え方だったようにしか思えない、というような内容だったように思います。

実はもう残り25分になっているんですけども、植垣さんはもうあちこちでお話されているでしょうから、1分以内で（笑）問題提起にお答えいただければ。』

植垣『植垣です、どうも。あちこちにいつも出ているので、今日は出来るだけ簡単にとっています。

野合問題ということで、僕は先ほどの前沢さんの意見なんていうのはきわめて的確に言っているなと思う。実際のこういうことをやっている世界に居ると思想問題を考えるヒマも余裕もない。そういう中で赤軍派と革命左派が、それなりに一緒にやっついこうという雰囲気になったのは、経験が同じなので、経験を通じた意識の方が先行していたですね。そんなことが大きかったと思います。

当時、僕は青砥さんと同じような世界を歩んできたもので、大学まで一緒に1年生の時から付き合いで、最後まで付き合う羽目になるとは想像つきませんでした。』



金『彼ら2人は弘前大学で同級で、医学部と理学部です。』

植垣『1年生の時から酒飲み友達で、夜中ふらふら歩いている青砥をつかまえて、お前何やってんだという調子でやっついて、それはそれとして、山に居た時に暴力的な展開にな

って死者まで出ている、そういう現実に向き合った時に、僕は坂東に「こんなことやっていいのか」と言った。ものすごい戸惑いを感じましたから「こんなことやっていいのか」と言ったら、坂東が「党のためだから仕方ないだろう」という言い方なんです。

当時は党のためとか言われると、そこで思考停止という人間でした。残念ながら、それ以上、物事を考えることができなかつた、ということです。

もう一つは、自分自身が武装闘争の中で死ぬんだ、という思いでいますから、自分が死ぬということを前提にすると、他人に対しても死を強制していくということに対して、それ程の緊張感が無かつたという面もあります。

特に僕の場合、ずっと軍で活動してきましたから、さらにもう一つ、野合問題に戻るんですが、実は連合赤軍と言う話が出たのは1971年の7月ですか。ところが、僕ら現場にいる兵隊の方には、全然そんな話は知らなかつたですね。

連合赤軍が結成されたということだけが、その後に伝えられた。だから連合赤軍が結成されたというのは、僕ら軍の方の人間にとっては、まるで他人事のようなことでした。

その後、共同軍事訓練を経て新党が結成されるんですが、その時は僕も青砥も実は全然、そういう話が展開している場になかつた訳ですが、その時も事後報告です。

だから、全てが事後報告でやられる世界の中で、野合だ何だと言われるのは、ちょっと僕ら現場の人間にとっては・・・現実の展開している世界は、そういう問題とはもっと違う形で進行している訳で、そっちの表面的なところでの話よりも、その辺の深い問題を考えた方がはるかにいいのではないかと思います。』

金『植垣さんのお話は、前沢さんと非常に似た立場のお話をされているんですね。要するに思想問題を語ったり、思想問題によって2つの組織が一緒になるとか、そういうような現場の人間には余裕はなかつたし、そういうこと自体、知らなかつた。

先ほど出ました坂東に総括要求で「こんなことやってていいのか」と言った時に、「党のためだ」と言われることによって、ある意味での個人の主体性を失っていったんだろう、そういうようなお話だつたと思います。

もう少し、後でフランクに短くいろいろ討論を重ねたいものですから、最後に雪野さん、お願いしたいんですけども、雪野さんが沢山銃を取つたために、多くの死者が出たんですけども、(笑) それに対する反省も含めてお話いただければと、あの時取らなければよかつたとか。』

雪野『真岡で取つた銃はたぶん死者が出ていないと思うんですね。(笑) ただ、その前に私が、8月に逮捕される1月ほど前に、学生が山に持っていく間、1月ほどバックに入れて持っていて、一度、そのピストルが浅間山荘で坂口君が田中さん発砲して亡くなつたんです。

それで責任と言われるんですが、私は銃そのものについての責任はあんまり感じないんで

すね。じゃあ銃を作ったアメリカのスミス&ウエッソンの社員に責任があるのか、それをフィリピンから日本に持ってきた人に責任があるのか、それを私がもらって逮捕される前に西丹沢のアジトに行ったんですけども、そこで渡したんですね。

じゃあ私が持ってきたことに責任があるのか、たぶん殆ど感じていない。

それよりも、その当時我々がやろうとしていた武装闘争、その思想ですね、それを私が支持していた、そこに責任を感じます。

それで恐らく警察官は、ライフルで撃たれているんですけども、ライフルを撃ったことについて責任を感じると、これは逆に責任を感じるんですよ。我々は主義として武装闘争を、しかも敵の兵員を殺傷するような闘争をやろうということを言ってまして、実際は私はもうちょっと違うニュアンスがあったんですけども、それにしてもそういう闘争を支持していましたから、準武力的な闘争を一部含めることについては同意していました。それについて責任を感じます。ですから、物を持ってきたとか、それを作ったとか、渡したとか、それよりも責任を感じるのが、当時の我々の政治思想、軍事方針ですね。』



金『ありがとうございます。今、沢山のいろいろなお話、テーマがでているんですけども、本当は、これをやると24時間朝まで生テレビくらいやらないと、それでも切りの無い話だと思っんですね。

ただ、今出てきている話の中で、実は塩見さんや三上さんや鈴木さんがいらっしゃるので、少し話題を絞って、最後に雪野さんが、かつて武装闘争を支持していた、そのことについては責任を感じる、という話が出てきましたけれども、武装闘争というものが実際必要だったかどうかという問題もあるかもしれませんが、何故そこまで行かなければならなかったのか、という問題もあると思っんですね。

それについて、せっかく塩見さん、三上さん、鈴木さんがいらっしゃるんですから、そのことについてお話をお互いにし合っただければいいかな、と思っんですけど。

まず武装闘争の必然性があったかどうかについて、三上さんの方から、短くお願いします。』

三上『当時ですね、運動からいうと、まず当時の新左翼運動全体がどこに特徴があったかという肉体を賭けるというか、そういう割と肉体的な行動、それが一つ特徴があると思っんですね。この背後にはですね、例えば社会に我々が参加する時に、様々な社会意識と一般に言ってもいいと思っんですが、これは民主主義でも自由でもいいんですが、それが理念としては、割とその時代に流通していたり、割と成熟していたんですけども、それ

と一種の現実意識との間に距離というか、空白感みたいなものがあってね、それが肉体とか身体とか、身体行動というやつがね、ある面で支えていたとか、これはそういう側面がありましてね、当時の新左翼の行動というものを、武装という以前にどういう特徴があったかという、そのことによって、我々は自分で例えば行動する時に、行動することによって、これで自分の人生はどうなるんだろうか、親はどういう関係をもっているんだろうか、社会はどうなんだということ、自分の中で対話をしている訳ですよ。自分と自分が行動することによって、反響しあっている、対話をし合っている訳です。それは個人がやっている訳ですけど、その部分によって初めて、我々が抽象的な社会ではなくて社会に参加する、社会を実感できるという要素が、当時の行動様式の中にあった訳です。

ですから、その部分で、例えばその方法が理念として存在していた武装と、革命のためには武装が必要だということの間には、やっぱり、僕は距離があったんだという風に思っています。

ですから、そのところは割と僕は醒めていたとか自覚してまして、ゲバ棒闘争もいろんな闘争も、その運動が持つ武装闘争が現実可能な効果という意味で言ったら、先進国では武装闘争というのは不可能だと思ってましたし、当時の革共同、いろんな連中でもそうですけど、武装闘争がそういう意味で、例えばベトナムやいろんなところで起こるような意味を持っているということは殆ど信じていませんでした。それは醒めていました。そのことによってではなくて、武装という意味があるとなれば、それは身体を賭ける、その身体の中で初めて、日本では社会性というものが現実性を持つためには、そういう媒介が必要なんではないか、それことしか社会に参加の方法がなかったのではないか、本当の意味で社会に参加できなかったのではないか、という意味で暗黙の行動様式というのが、あれほど多くの人たちに伝播した、あるいは多くの人たちを掴んだ理由というのは、理念やイデオロギーではなくて、その行動様式が持っていた原因と結果の対話を通して、社会性とか他者との関係を実感できた。

ある面で「60年代リアル」という本があるんですが、そういう意味での現実意識、そこで通路ができた。たぶん、そのことが、日本における近代化とか、近代的な理念と実際の現実意識の間に肉離れしたことを、当時の我々は受け止めていたのではないか、という風に僕は思っていました。

ですから、当時、うまく言葉にならなかったんですが、理念上の武装闘争という意味では僕らは全然塩見さんたちとは違っていました。違う武装闘争の意味を持っていた。

ただ、その我々の武装闘争の意味、行動の意味ですよ、そのことが、どこに根拠があるのか、という意味で左翼思想の中にちゃんとそれに答えていく社会思想としてなかった。

たぶん、三島由紀夫は違う意味で答えたと思うんですね、腹を切ることによって。日本的な伝統思想を含めて、日本人の社会構造として文化と彼らは言ってますけど、そういうことを捉えていたと思う。



ですが、そのところが実は僕らにとってみたら、現代でも社会と我々がどう関わるか、我々が本当の意味で社会の中で、我々の意思で社会的肉体を運んでいくのか、社会的に社会というものを実感できるのか、そういう意味でものすごく別の意味で孤独感があると思うんですが、そういう社会の中での孤立、孤立している社会的な感性というやつに対する、あの時代の一つの回答としてそうだったと思っています。』

金『今、三上さんのお話は、一つは新左翼というのは身体の直接性を賭けるというような形で現れてきたと思うんですね。60年安保の時に全学連主流派と言われる新左翼グループが、体を張って警官隊とぶつかる。その横を共産党や社会党は手をつないでデモをしていくという光景があったと思います。

それが、1967年の10・8以降、ヘルメットとゲバ棒という、まだ、そういう意味ではある一段高くなった武装という形が出てきたと思うんですけども、塩見さんの時に全くそれと違う段階が出てきたんですね。

塩見さんの場合は、要するに世界党、世界赤軍、世界革命戦争というお話が出てきたと思うんですけども、今の三上さんのお話を受けて、塩見さんどうですか。現実と理念の落差があったんじゃないかという話が出てきていると思うんですけども。』

塩見『僕はですね、当時の学生青年というか、僕なんかも含んでですけども、内的な精神構造から見たら実存主義、マルクス主義的な装いを持った実存主義で、投企してアンガージュするというか、それで自己満足していた。ある意味では疎外論的な要素が本質的にある。じゃあ武装闘争自身が現実性を持っていなかったかどうかという問題なんですけど、これについては、確かに日本は第二次高度成長に入り、安定成長に行くんだけど、日本自身で見たら経済成長が続いているという状況はあったと思うんですね。

にもかかわらず、国際的に見たらベトナムの反侵略戦争を軸にして世界的な高揚が、特に第三世界を基軸にしてゲバラの呼びかけとか、いろんなスチューデント・パワーも含めて進んでいた訳だから、武装闘争が一国的規模で見れば非常に現実性がないが、国際的規模で見たら私は現実性があったということですよね。

もう一つは、国内の運動自身の発展過程で見た場合に、やはり運動が登り詰めて最後まで行ききらないと止まらないというのがある訳で、そういう意味では赤軍派は上り下り頂点まで推し進めていく、そういう意味でそこだけは根拠には私はしたくない。それは物事の道理であって、勢いの赴くところに進めていくのは全然不当ではないし間違っていないと思っている。

それからもう一つ、前沢君と雪野君が仰った訳ですけど、もう解体していて野合とかいう状況ではなかった、とおっしゃる訳ですよ。ただ現実の指導部の関係では、やっぱり永田さんと川島君との論戦とかがあり、赤軍派内部では大菩薩峠組が出てきてない中で森君なんかとの論争があった、という状況が現にあって、それで実際に全体的に見たら連合

に留めるべきであって、新党作るとか合流するとかに反対意見は全然なかった。そんな中で12名が亡くなっている訳だから、その点で見たら当事者の兵士たちがそういう風に考えないと、指導部は新党を作ることに2つの党派を強引に綱領がないにもかかわらず、武装という名のもとに新党を作ることによって、それに対する反対派を粛清する。森・永田の体制に統制して行く、という意味で抵抗する者を排除するような形をとった。こういう点では野合。綱領に従う人々がこれを無視して強引にやったということが、大きな決定的な要因になっていく、というように私は思っています。』

三上『先進国の中で本当に武装闘争がどういう風に可能かということは、僕もずいぶん考えました。これはベトナムとかキューバとかいうのは別個で、特に僕が注目していたのは、やっぱりアメリカとフランスとかヨーロッパの運動がですね、実際上どうなるんだということと、自分の行動、自分らの行動が武装という理念と、やっぱり距離がある、そういうところじゃないなという、この時代感覚というのはどうなんだろうということで、僕は僕なりにずいぶん考えていたんですね。

実際のところフランスの5月革命でも武装闘争というのはあまり起こっていませんし、ヨーロッパでイタリアとかドイツは別ですが、少数派です、多数の大衆運動としてどうなったという意味でそうです。アメリカはブラック・パンサーという特殊な、黒人民主闘争がある程度解体して、民族化で起こっている。先進国の中で民族問題を介在しないで武装闘争は可能かということに対して、やはり違うんだろうなということで、僕ら自体が自分たちのやっている肉体の行動感覚というか、裏返して言うと内意識の問題、その行為の内意識は何だったんだという、強烈な運動の行動感覚ですか、その行動を支えている意識が何なんだということを考えた時に、どうしてもそれは武装ということではなくて、日本の社会の中で、どのように我々の意識や社会性を獲得できるか、あるいは意識の中に社会性が獲得できるか、という意味で、たぶん近代的な社会意識が成立してくると同時に実際、我々の感覚としての社会感覚の中に、ある種の肉離れというか、そういうものがあって、そういうものを埋めようとする感覚だったんじゃないのか。

そこにですね、たぶん革命という概念を考えた場合に、社会が何をもって変わるかと言った時の革命のイメージが、たぶんずいぶん違ったんだ、僕はそういうことをすごく考えています。』

椎野『今、お話を聞いていると、70年当時にブントが割れた時の、三上さんが出て、左に塩見さんが出ていって、僕らが中央に残った時のブントの論争がまるでそのまま繰り返されているような印象を受けるんですけども。』

金『それだったら何の進歩もないですよ。(笑)』

椎野『一つ、たぶんここにいらっしゃる若い方の疑問としては、さっきから武装、武装という言葉が出ているけれども、その武装っていったい何んだ、ということがあると思うんですね。当時僕は塩見さんなんか雲の上の存在の組織の末端の活動家だった訳なんですけれども、武装ということがよく言われました。

戦旗派でも恒常的武装闘争をこれからやるべきなんだと言われた時に、さっきの植垣さんとちょっと似ているんだけど、じゃあ僕らはどういう風に捉えていたかというのと、とてもじゃないけど、革命の武装と思えなかった。せいぜい僕らの段階では火炎瓶、ゲバ棒程度ですよ。

それを、こちら側に座ってらっしゃる方は、そこを何と言うか、もっと突き詰めていったというか、そこを踏み込んで行っちゃったと思うんですけども、だから、今語られていることの武装って言うものはいったい何なの、ということがたぶん分からないと思うんですよ。

当時の僕らの感覚で言うと、武装というのはその程度で、本当に革命につながる階級間の闘争として、何か内戦が起こったりするような武装というものは、全くそこまでは僕は考えていませんでしたよ、ということだけ、ちょっと一言注釈しておきたい。』

金『今、武装闘争という言葉が出たんですけど、武装闘争って、一体どいういう意味があったんだ、その意味の内実はどういうものだったんだ、諸党派によって捉え方が違っていったという話が出てきていると思うんですね。

それについて、右翼武装闘争派であった鈴木邦男さんは、やはりゲバ棒、火炎瓶、銃、爆弾とありましたけれども、やはり日本刀じゃないとダメだとかいろいろあると思うんですけど・・・』

鈴木『僕は塩見さんに聞いたんだけど、大札幌で捕まった時は、そこに訓練していた人たちが首相官邸を襲って、革命政権を作るんだという、ちょうど戦前の右翼、5・15事件や2・26事件と同じような考え方で首相官邸を押さえて、また、警官、機動隊を撃破して塩見さんが大統領になるという、それで革命憲法を作るという、それで赤軍を作るという壮大な夢を持っていた、それはそれで、非常に素晴らしいなと僕は思ったんですよ。それで70年に「よど号」をハイジャックして北朝鮮に行った時、彼に会って話を聞いたんですけど、「非常にマンガじゃないか」と言ったら、「マンガじゃなかったんだ。実際に、あの頃は平壤は国際都市になって、世界中から革命家や反政府ゲリラがいっぱい集まってきた。それで訓練を受けていた、軍事訓練を。それでアフリカや南米に散って、実際に革命を成し遂げた人たちがいっぱいいる。5ヶ国くらいは革命を実際にしたんだ。だから、自分たちだって出来る可能性はあったんだ」と言ってましたね。ただ、彼らは軍事訓練を受けさせてくれなかった。

何故かという、南米やアフリカと違って、日本はそういう彼らの受け皿がない。

一番決定的なのは連合赤軍事件です。彼らのところへ北朝鮮の人が新聞を持ってきて「ほら見ろ、お前のところでは仲間殺しをしている。そんなことでは、お前らを国に返して革命やらしても出来っこない。」それが一番大きかったですよね。

だから、もし連合赤軍事件がなかったら、彼らは帰って、そしてやったかもしれないですね。右からは三島事件があるし、左からは赤軍が決起する、非常に面白い展開になったかもしれないですね。

それと、左翼の場合は、自分たちがやらなかったらだめだ、自分たちとちょっと似ている奴は絶対許せない、そいつらをまず排除しなかったら出来ない、というのは大きいですね。

右翼の場合は、例えば血盟団事件、5・15事件、2・26事件というのは、少しずつニュアンスが違いますよね。競い合っているんです。あいつらだめだから、じゃあ俺たちはこうやるこうやる。まず似てる奴を殺してから自分たちがやるという発想はないですよ。そういう点、左翼の場合は人間に対する期待度が高すぎます。(笑)非常にレベルの高い革命家を集めて、それでも尚且つ、もっと高めようとする。右翼の場合は偏差値とかはかまわない。例えば100の場合、10でも5でもいいから、それを使おうとしますよ。だからもったいないと思うんですね、連合赤軍事件の場合は。』

金『今の鈴木さんのお話ですと、要するに左翼の運動は本当にレベルの高い少数の運動でしかない、ところが民族派は、どんなにレベルが低くても受け入れるから、大きい運動になれるんだと。』

鈴木『そうです。それから当時「一水会」に入った人で「左翼はレベルが高いからなかなかトップになれない。でも新右翼はレベルが低いから(笑)俺がトップになれる」ということで入ってきた人が結構いました。

そういう点で人間を大事にしているんです。(笑)浅間山荘もそうですよね、銃撃戦に打って出ればいいんですよ、今、言ってもしょうがないですけどね。あるいは要求を出して飛行機を持ってこいとか、ヘリコプターを持ってこいとか、それを仲間殺しをやっちゃったから、その後の方針を出せないし、ああいう風になったんじゃないかなという気がして。これからは、もっともっと人間を使ってやってもらいたいですよね。皆さん方も。』

金『やはり武装というと、どうしても今日は連合赤軍40年ということもありますから、塩見さんに、我々の武装というのはこういうことだったんだ、あるいは武装の質というのはこういうことだったんだ、というお話をされたことがあると思うので、手短かにお願いします。』

塩見『鈴木さんの、何か私が5・15みたいなことをやって首班になるということについ

ては、あなたは正確に私の言ったことを伝えていないですよ。私は首班は、中核派のタケイシにしよう・・・』

金『それじゃ裏切りじゃないですか、赤軍派に対する。我々は何のために・・・』

塩見『だから赤軍派は、セクト主義で他党派を抑え込んでとか解党するとか、そういう発想はほとんどない党派です。その上で実現性があったかどうかについて、国際的な条件はあったけれど、僕自身はあの闘争で前段階武装蜂起がはっきり位置づけられていなかったんだけど、勝つとしか思ってなかった、ということ。

革命的敗北主義で、やって、いわばブントの島さんが言ったように「虎は死んで皮を残す。ブントは死んで名を残す」。鈴木さんが喜ぶような言葉だけど、そういうような、負ける闘争でもやらなきゃならん時はやるんだということ。

それでもう一つは、カストロやゲバラなんかも自分が進んでやって、やれることは部下にやれと言うけど、自分がやれないことはやるな、実際にカストロは自分でやるべきことをやって、それに付いてこいと言っている訳でしょ。

僕は森君たちがどんな形になるのか、情報は殆ど入ってないけれど、どういう風に彼らは進むのかということについて、想像ができなかった訳だけど、ただ、僕自身が言えることは島さんじゃないけど、やっぱりゲバラなんか見習って革命的敗北主義で名前を残すべきだ、それでやってくれたら、実際に負けるだろうし死ぬこともあるし、追及を受けることがあっても、それで十分いいというような意味で僕は最後に総括の論文を書いた。

そういうような形では進まなかったことが、非常に僕にとっては悔やまれることだ、ということなんです。』

三上『塩見さんね、その件で言うと、結局60年の6・15から6・18の過程で何を僕が総括したかに関わる訳です。僕らは6・15で国会の構内を占拠して60年安保があって、6・18にブントが再度国会に突入できなかったからブントがだめたという議論があったことに対して、本当にもう1回武装闘争ができたかということに対して、僕は1年生の当時活動家だったんですけど、そこをものすごく考えたんですよ、70年に至る過程で。

たぶん、そこをところで武装闘争という形でない、60年のあの大衆運動の意味が、そのことが持っている革命性ということの意味が、ブントが言ったそういうものではない。先進国の中で起こっている、おそらく日本の中で起こっている、あの当時の急進的な学生の行動が、そうじゃなくて、学生がその時代に応じて獲得しようとしていた新しい社会意識の獲得、あるいは社会的な存在の理念的な名目性を実質的な形で埋めようとする、そういう運動の持っている革命性なんで、それはある種の近代がある面で肉体を持ったという実現でもいい訳ですけど、そこところが全然違うというか、塩見さんとは同じ学年なんで

すけど、60年の6・15から6・18の過程の教訓がものすごくあったんだろうなと思います。

もう一つ、鈴木さんが言った人間を大事にしなくちゃいけないというのは、これは僕も会社をやったことがあるんですが、思います。

これは、左翼は何て人をひどい使い方をしてきたなということは、ものすごく反省があります。これは逆に言うと、近代的な人間観が、日本の社会がむしろ持っていた伝統的な義理や人情を含めた人間関係を越えられなかったんだ。そういう意味では、むしろ日本における近代的な社会思想がシステムとして受けられていて、本当の意味で人間の精神として受けられていかないことから生じている、それだったら、日本が近代社会を批判した以前の社会思想の方が社会的な関係を深めた人間的に義理とか人情とか豊かなものが残っている、という意味で痛烈に僕も反省したところです。

これは、我々が近代を超えていく時、近代主義を超えていく時、どういうことが近代主義批判の問題となるのか、という意味で日本の中で近代的な社会意識や社会関与が、どのように根付いたかと言う問題と絡むんですけど、それって良く分かります。』

金『実を言いますと予定の時間は来ているんですね。始まりが10分遅れましたんで、本来、これで時間なんですけど、今、塩見さんの方から我々赤軍派としてはビックリするような発言も出てきましたので(笑)、最後に青砥さん、植垣さんに簡単な感想をいただいて第2部を終わりたいと思うんですけど。』

青砥『私は塩見さんが提案された前段階武装蜂起、過渡期世界における攻勢的な局面としての前段階武装蜂起という方針に賛成して赤軍派に結集したものですから、そういった方針を出されたことについては別に何とも思っていないんですが、もうちょっと徹底して欲しかったとは思いますが。』

ただ、さきほど、武装の必要性があるかどうかという話になりましたけれども、武装というのは例えばゲベ棒でさえ武装と考えれば武装なんですけど、私どもが描いていた武装闘争はそういったものではないと思いますね。

前段階蜂起が武装闘争なのかということになると、実は前段階武装蜂起のイメージといったものが、私もそうですし、ここに居る金もそうでしょうが、具体的なイメージといったものがなかなかよく分からなかった。何が前段階武装蜂起なんだ、首相官邸に武装突入するのもいいけども、どういった闘争があるんだ。』

金『今、言っていることは、前段階武装蜂起をして我々も死ぬんだ、我々は捨石になるんだと、ただ、その前段階武装蜂起のイメージがどうしても湧かなかったんですね。』

青砥『まあ、そういうことです。要するに、それまでの武装カンパニアとどう違うんだ、

防衛庁突入闘争とどう違うんだ、何が違うんだ、爆弾と武器はそれは武装闘争なのか、獲得目標は見えてくるのか、ということについては明確なイメージが湧かなかった。

塩見さんも、そういったものについては明瞭な方針といったものを出しておりません。

ただ、私どもは時に勢いの赴くままに前段階武装蜂起に結集してしまったんですよ。

それはそれで構わない、さきほど言ったとおりそれは社会参加であるんだから、それはそれでいいですよ。

私が考える武装というのは一体それは何かというと、理想的な武装部隊が現在の社会の状況とか法律の状況とか、そういったものから相対的に独自に一つの権力とか独自の運動体として持続できる状況が生まれた時に、初めてそれは武装したと言えるのであって、そういった意味で蜂起路線といったものを、私どもが結局これはできないということで止めて、部隊をゲリラ部隊に改組して、M作戦というチンケな作戦でしたけれども、そこを始めた時に初めて我々は武装ができたんだろう、鉄砲を持っているかどうか武装じゃないんですよ、そういった風に私は考えました。

現実的にその時にどういった状況が生まれてきたかということ、それまで我々が想定していなかったような、例えば日共山村工作に使った武器を提供するという形で出てきたり、あるいは〇〇が我々をかくまってくれたり、そういった形で少しずつ日本の民衆の中に、武装すればそれに結集してきてくれる、支えてきてくれる部分があるんだな、というのを実感として感じた、そういった局面があったですね。

そこに初めて、塩見さんが言われている攻勢段階の武装の現実性といったものを獲得したのかな、と当時私は思っていました。

それは塩見さんが成し遂げたことではなくて、森さんを始めとした当時の部隊長たちが成し遂げた成果だと、私は思っています。

私は今でも塩見さんが好きですし尊敬していますが、このことについては、ちょっと塩見さんにクギを刺しておかなければいけないなと思っています。(笑)』

金『もう時間もありませんけれども、植垣さん、さっき1分で切っちゃいましたので。』

植垣『これはもう一つは当時の僕自身の何で武装闘争に参加したのかということになるんですが、当時の闘争全体、全共闘運動も含めて、当時、武装闘争というものが、実際にはいろんな形で提起されていた訳で、それに連動して、いろんな軍事論文がありました。

ところが、実際にやってないんですね、やってない中で軍事が語られている。そういう状況の中で僕が思ったのは、どういう軍事論であれ、とにかくやってみなければ分からない。じゃあどういう形でやるのか、もうゲリラ戦しかない。とりあえずゲリラ戦でやるしかない。

そんな気持ちで、当時の赤軍派の、僕は赤軍派の武装に関わって、もちろん塩見さんは獄中にいたし、そういう中であって、ゲリラ戦を始めた。

当時の僕の気持ちは、率直に言って、この軍事思想にあるんだ、そういうのはなかった。逆の言い方をすれば、やっけていく中から、どういふ軍事が可能かということに僕なりに考えていました。

はっきり言って、塩見さんの論文なんかとても理解できなかった。ただ、すごい軍事用語が並んで連なっているんでビックリしちゃった状態です。

とりあえずそんなところですよ。』

金『時間が来ましたんで、第2部をここで終わらせていただきたいんですが、今、武装という問題が出てきたんですけども、正直な話、時間が短いこともあるんですけども、非常にリアルな話にはなっていないと思うんですね。

今回はもうちょっと突き詰めたところもあることはあるんですけど、一度、こういう実際に武装ということが我々にとってどれだけのリアリティがあったのか、実際にどういふ質のものであったのかということ、一度語る場があればいいのかなと思ったりもしています。

また別の機会が作れればと思っています。

皆さん、今日は、塩見さん、鈴木さん、三上さん、ご苦勞様です。(拍手)』

(第2部終了)